

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

イタリアそろばんの旅⑦

* そろばんとバレーボール *

木下 和真

その日の午後、私はコラードさんに助けを求めた。授業が Lezione 2に入ると、理解できない生徒が続出したためだ。

「今から話すことを簡単なイタリア語にしてください」

コラードさんをお願いします。

「わかりました」

返事を聞くや否や、私は話し始めた

「バレーボールをしたことがありますか？ バレーボールをするとき、ボールが低いところにあると、どのように返しますか？ 両手を握り、このようにレシーブします」

コラードさんは黙って私の話を聞いている。

「じゃあ、ボールが高ければどうしますか。 ……」

最後まで話し切ると、コラードさんは私が開いたノートにイタリア語を書き始めた。

私はだまって鉛筆の先を見つめる。1分もたたないうちに、6行ほどの文が出来上がった。今話した内容が、見事にまとめられている。すぐさま、ノートを受け取り、知らない単語の発音を確認する。

pallavolo (パツラボーロ) = バレーボール

palleggio (パレツジョ) = トス

bagher (バーゲル) = レシーブ

イタリア語のバレーボール用語は、初めて聞く響きだ。コラードさんの助けがなければどうにもならなかっただろう。

その日の授業で生徒たちが理解できなかった

のは五珠を利用した足し算だった。

例えば 4 に 4 を足すような問題だ。

そろばんに 4 を入れた場合、一珠は全部上になっているので、一珠を利用することはできない。なので、五珠を利用することになる。

まず 5 を足す。4 を足したいのに 5 を足したということは 1 多すぎる。よって一珠を 1 つ引いておく。

まとめると「4 を足すときは、5 を足して 1 を引く」となる。

同様に考えると「3 を足すときは、5 を足して 2 を引く」「2 を足すときは、5 を足して 3 を引く」「1 を足すときは、5 を足して 4 を引く」となる。

これが今回の課題だ。

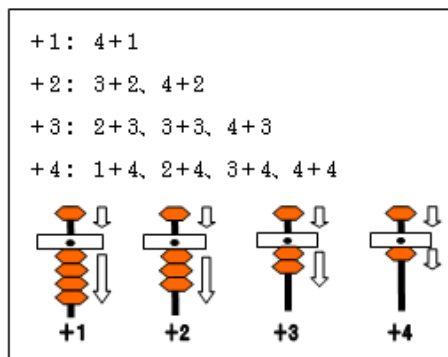
これをイタリア語にするとこうなる。

per più 4, aggiungo 5 tolgo 1

per più 3, aggiungo 5 tolgo 2

per più 2, aggiungo 5 tolgo 3

per più 1, aggiungo 5 tolgo 4



1 から 4 までの数が、5 にいくつ足りないかを理解していれば問題ない。一番小さい子で 9 歳だから、これくらいのことはすぐに答えられるだろうと思いチェックしてみた。

「per più 4 ?... (4 を足すときは? ...)」

と言って、一人の生徒に答えさせる。

「aggiungo 5 tolgo 1 (5 を足して 1 を取る)」

とすぐに反応してほしいのだが、なかなかうまくいかない。

「aggiungo 5 tolgo... (5 を足して、取るのが...)」

と、うながしても、答えは「4」だったり「3」だったりする。

なかなか、5 になる組み合わせの数が見つめないようだ。この組み合わせが分からないと、五珠を使った足し算ができないのだ。授業前に何度も何度も繰り返す。

何度か繰り返していると少しずつ答えられるようになってきた。あとはそろばん上でこれをするようになる。大そろばんを利用して前で正しいやり方をみんなに見せる。そして、子どもたち自身にも大そろばんで珠を動かす練習をさせる。

ここまでできれば、あとは子供たちそれぞれの練習だ。



【大そろばんを使った授業】

前で何度もやったので、できると思いきや、これがまるでできない。

唱えた練習はすべて aggiungo 5 で始まっている通り、まずは五珠を動かすことから始まるのだが、これができない。

ある子どもは $2+4$ ができなかった。

最初の 2 は問題ない。

「più 4. Ma non ci sono abbastanza palline. (+4

だけ十分な珠がないよね) Quindi (だから)」

per più 4 è aggiungo 5 tolgo 1 を思い出し、この通り五珠を下して 5 を足し、1 を取ればいい。すると答えの 6 ができる。

しかし、その子は、まず一珠を動かす。3、4 とつくり、そして五珠を入れる。すると 9 になる。そして、いくつか一珠を動かして悩む。

同じパターンで悩む子が 9 歳のクラスだけでなく、10 歳のクラスでも非常に多い。私のつたないイタリア語ではどうにもならなかったため、コラードさんに助けを求めたのだ。

次の授業はこう切り出した。

「バレーボールをしたことがありますか？」

コラードさんに書いてもらった文を暗唱する。

そろばんの授業でバレーボール?? 子どもたちはこちらを注目する。イタリアでバレーボールは、サッカーに次いで人気の球技だ。

「バレーボールをするとき、ボールが低ければ、どうしますか? こうしますか?」

私は両手を上にあげてトスの動作をして見せる。子供たちは素直に首を振っている。

「ちがうよね。こうだよね。ボールが低いところにあれば、パーゲル (bagher) !」

両手を握り合わせ、肘から下の部分でボールを返す格好をする。

「じゃあ、ボールが高いところにあるときは?」

「palleggio (パレッツジョ)」

子どもたちは両手を上にあげてトスの動作をしながら答えてくれる。

「そう。ボールが上にあればパレッツジョ」

バレーボールでは、ボールが高いところにあればトス。低いところにあれば、レシーブと場合に応じた返し方をする。場合に応じて二つの全く異なったテクニックを利用する。このことが最も大切な考え方だ。

私は話を続ける。

「もしも、ボールが高いところにあるのに、パーゲル (レシーブ) をしたらどうなる?」

ボールの代わりに黒板消しを使い、大げさな動作で説明する。ボールは頭の上にあるのに、両手を握りしめ手を下から上に動かせば、ボールは見事頭にヒットする。痛みを感じて、あわてて両手を頭の上に持ってきても、そのときにはボールは

地面に落ちている。

「バーゲルかパレツジョ。二つのテクニックを同時に使うことは決してありません。そろばんも同じです。」

ここで話はそろばんにたどり着く。

「一珠だけで足せるときは、一珠を使って足しません。そろばんの下の部分をつかうので la tecnica bassa(テクニカ・バッサ＝下のテクニック)と名付けます。バーゲルですね。

一珠が足りないときは、別のテクニックを使わなければなりません。そう、五珠を使います。五珠はそろばんの上の部分にあるので la tecnica alta(テクニカ・アルタ＝上のテクニック)と名付けます。パレツジョです」

バレーボールのたとえ話を利用して、場合によって二つのテクニックを使い分けることをはっきりとさせておく。

「では次の問題はどっちのテクニックを使うでしょう？」

いろいろな足し算を示し、どちらのテクニックを使うかを皆で言うことにした。

「3+1なら?」「テクニカ・バッサ? テクニカ・アルタ?」

「足したい1が下にあるので、テクニカ・バッサです」

「4+2なら?」

「下には何もないので、テクニカ・アルタ。まず、五珠を動かします」

「2+1なら?」「テクニカ・バッサ」

「2+4なら?」「テクニカ・アルタ」

といった具合だ。それぞれに名前を付けることで、分けがはっきりし、頭の中の混乱が収まったようだ。

では、どうして子供たちはこのようなテクニックの使い分けができなかったのだろうか? それは以前紹介したアバコが影響しているように思う。最も原始的な計算は1、2、3、4……と順に数えていくことだ。この時もっとも簡単に利用できるもの

は指だろう。指を利用し一つずつ数えていく。十になると指だけは足りなくなる。何か一つ目印になるものを置き、10と1、2、3……と進んでいく。このとき小石を使って数えたのがそろばんの起源といわれる。

イタリアの小学校で使われているアバコはまさにこのとおりだ。一つ一つ足していき10集まると次の位に移動する。方法はただ一つ「1を順に足していく」だけ。そして、子供たちはこの考え方から抜け出すことができなかつたといえる。

それと比べ、日本のそろばんには五珠がある。五珠があることで足し方に使い分けが生まれる。その結果、迅速な計算が可能になる。そろばんが数え上げの道具ではなく、計算機となる瞬間だ。

バレーボールの例えをしてから、多くの子がこのレベルをクリアすることができた。しかし、こちらが教え方をどう工夫しても、どうにもならない子がいる。それは、答えを頭で計算してからそろばんに答えを入れる子だ。

全部暗算で計算して「先生できました。見てください」と自信満々で言ってくる。全部正解なのだが、「じゃあやってみて」というと、まるでできない。

「今はそろばんの練習ですよ。そろばんでやってみて」というと表情が曇る。そして、私が見ていないと、答えがずらりと書き込まれている。

こういう子は日本でも必ず存在する。そしてイタリアにも存在する。その子は元気がかわいらしい男の子だったのだが、悲しいかな最後までそろばんができるようにはならなかつた。

(当館語学受講生)

イタリア発月刊日本語新聞



イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

『カルヴィーノとアーティチョーク』

第12回

堤 康徳

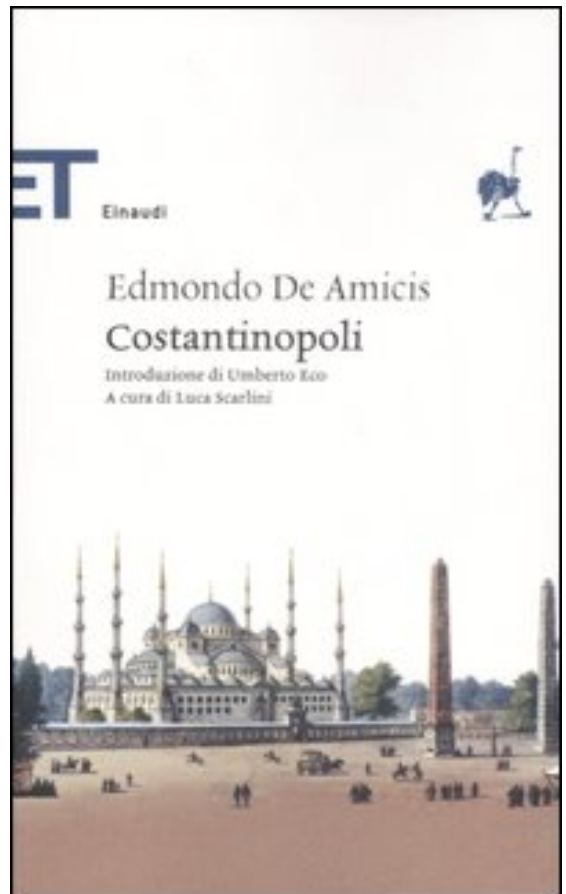
前回、『木のぼり男爵』について書いたところ、予想外のうれしい反響があった。ある大学でかつて私のイタリア語初級文法の授業を受講した学生が、拙文を読んでメールをくれたのだ。現在は、アラビア語とトルコ語を学んでいるこの学生は、トルコのノーベル賞作家、オルハン・パムクの2003年の著作『イスタンブール——思い出とこの町』(和久井路子訳、藤原書店、2007年)に、『木のぼり男爵』への言及があると教えてくれた。このパムクの本には、一生の大半をイスタンブールで過ごしてきた著者の、幼少から22歳までの思い出が中心に綴られている。木のぼり男爵の名は、パムクが子供の頃大きな屋敷内でどんな遊びをしていたかを述べたくだりに出てくる。

廊下まで続いている絨毯を海に見立て、安楽いすやテーブルを海に浮かぶ島になぞらえて、足を床に着けずにある物から他の物に飛び移っては、(あたかも足を地面に触れることなく木から木に飛び移って一生を過ごすカルヴィーノの木のぼり男爵のように)“床に触れず”遊びをしたり、……(pp. 21-22)。

この本で、ゴージェ、フロベールなどの西洋人作家たちによるイスタンブール論が検証されている点も興味深い。パムクは、19世紀にイスタンブールについて書かれた本のなかでは、ゴージェの『コンスタンティノープル』(1853)が、イタリア人の作家、エドモンド・デ・アミーチスの『コンスタンティノポリ』(1877-78)に次いで、最もすぐれていると書いている(p. 284)。つまり、イスタンブールを知り尽くすトルコ人作家にとって、デ・アミーチスの『コンスタンティノポリ』こそが、19世紀にこの町について書かれた最高作ということになる。

私も早速、現在エイナウディから刊行されてい

るこの作品(Edmondo De Amicis, *Costantinopoli*, Einaudi, 2007)を取り寄せてみた(完全版ではなく、原本の全17章から6章を抄録してある)。ウンベルト・エーコが「一にして三なるイスタンブール」と題された序文を寄せている。この題名は、ビュザンティオン、コンスタンティノープル、イスタンブールという三つの名前と三つの文明をもった都市をキリスト教の三位一体の教義にたとえたものである。エーコは、海路からのイスタンブール到着が、映画の移動撮影のように町の光景を浮かび上がらせると指摘したうえで、このように続ける。



【Costantinopoli 表紙】

イスタンブール到着について書かれたあらゆる描写のなかで、最も映画的な描写は、おそらく、ネルヴァル、ゴージェ、フロベール、ロティほど国際的に著名ではないある作家の手になるものである。それは、エドモンド・デ・アミーチスである。イタリアではすべての子供たちが(1866年から少なくとも私の世代までは)、彼の『クオレ』を読んで成長したが、いまやこの作品は、立派な感情が話

め込まれすぎているとみなされる傾向にある(それなりの理由がないわけではないが)。しかし、デ・アミーチスは卓越した新聞記者でもあり、『コスタンティノーポリ』(1877)がそれを証明している。あまり知られてはいないが実にみごとなこのルポルターージュを、私はイスタンブールへの最初の旅に携帯した(Umberto Eco, *Istanbul, Una e Trina*, in Edmondo De Amicis, *Costantinopoli*, Einaudi, 2007, p. VI)。

デ・アミーチスは、その名を不朽にした『クオレ』(1886)を執筆する前に、新聞記者としてさまざまな国々を訪ね、『スペイン』、『オランダ』、『モロッコ』などのすぐれた紀行文を残している。

デ・アミーチスの『コスタンティノーポリ』は、次のような旅の興奮に満ちた一文で始まる。

コスタンティノーポリに入ったときに私がおぼえた感動は、メシーナ海峡からボスポラス海峡までの10日間の航海で見たすべてのものをほとんど忘れさせたほどだ(p. 5)。

イタリアを出て9日目の夜、マルマラ海を航海中に、デ・アミーチスは、パレルモ訛りのある船長からついに告げられる。「皆さん! 明日の明け方に、スタンブール(金角湾の南側に位置するイスタンブール最古の地域)の最初の尖塔が見えるでしょう」(p. 5)。デ・アミーチスは、曙光が射すやなや胸を躍らせて甲板に飛び出すが、失望する。霧が出ていたのだ。このくだりはエーコが序文のなかで簡潔に要約しているので、そちらから引用しよう。

しかし、船長は彼を安心させる。その霧こそ、到着をさらにすばらしいものにするからだ。船は舳先を皇子諸島(マルマラ海に浮かぶ9つの島。現アダラル諸島)に向ける。当時の船の速度では金角湾に最終的に停泊するまでは少なくとも2時間はかかる。町への接近はしたがって一口ずつワインを味わうように徐々に行われた。1時間の航海ののち、船長は白い点を指す。きわめて高い尖塔の先端だった。それからしだいに、その尖塔の下に、ほかの家々の輪郭と色が明確になってゆく。(中略)そこへ突然、霧のなかに、「いまだ蒸気の

幕に覆われた、このうえなく高くおぼろげな大建築の巨大な影が、丘の頂きから天に向かってそびえ、丸みのある堂々たる姿を空中に現した。それは、どこまでも伸びた優美な4本の尖塔に囲まれ、尖塔の先端は曙光を浴びて銀色に輝いていた」。聖ソフィア大聖堂(アヤソフィア)だった。無から突然立ち上がるその姿を見るのは、さぞすばらしかったことだろう(p. VII)。

エーコ自身は、イスタンブールを訪れたさい、内陸から町に入ったため、この絶景をじかに見てはいない。いったん町に着いてからフェリーボートでマルマラ海を横断したさいも、日中で霧が出ていなかったために、その美しい光景を見られなかったという。そのことを残念がるようすが文面から伝わってくる。

ウンベルト・エーコの長篇第4作『バウドリーノ』(Umberto Eco, *Baudolino*, Bompiani, 2000)は、コスタンティノーブルを主要な舞台のひとつとしている。

北イタリアの農民の子として生まれた主人公のバウドリーノは、イタリア遠征中の神聖ローマ皇帝、フリードリヒ・バルバロッサに気に入られて養子となり、西洋と東洋をまたにかけた冒険を繰り広げたのち、1204年4月の第四回十字軍によるコスタンティノーブル略奪を目撃する。そしてこのとき、バウドリーノは、聖ソフィア大聖堂で略奪のかぎりを尽くす十字軍士から、ビザンツ帝国の実在の歴史家、ニケタス・コニアテスを救い出し、自らの数奇な物語を彼に語り出すのだ。

じつは、バウドリーノと仲間たちは、謎のキリスト教国、司祭ヨハネの王国を目指して、インドと呼びならわされた東方に向かい、そこでさまざまな驚異に遭遇したのち、『千夜一夜物語』に登場する伝説の巨大なロック島にぶら下がり、コスタンティノーブルに舞い降りたのだが、それが明らかになるのは小説の後半である。

コスタンティノーブル陥落後に書記官長の地位と家屋を失って対岸のニカイアに避難したニケタス・コニアテスは、そこで21巻に及ぶ『歴史』を完成させた。この大著のなかでニケタスは、キリストの敵となりては十字軍士の悪行を厳しく糾弾している。エーコは、このニケタスの記述を参

考にして、コンスタンティノープル略奪のもようを描き出したと思われる。

これより 20 年ほど前に、バウドリーノと仲間たちが初めてコンスタンティノープルを訪れたときのことが小説の中盤(第 20 章)に描かれている。彼らは、司祭ヨハネの王国までの道のりを記した地図をもつギリシア人修道士をさがしに、ビザンツ帝国の首都に向かったのだ。一行はヴェネツィアから海路、コンスタンティノープルを目指す。この街を最初に船から見たときの情景が以下のように描かれている。



【バウドリーノ表紙】

バウドリーノと仲間たちが、明け方、甲板に上ると、海岸は濃い霧で覆われており、失望感が広がったが、船長は彼らを安心させた。霧が出たときは、ゆっくりと町に近づかねばならない、いずれ夜明けの光を含んだ朝霧はしだいに晴れるだろうから、と。

さらに一時間の航海ののち、船長は白い点を指差した。丸屋根の先端部分が、霧をうがつように顔を覗かせていたのだった……。それからすぐに、その白い点から、立ち並ぶ宮殿の柱が海岸沿いに浮かび上がり、だんだんと、家々の輪郭と色、ばら色に染まった鐘楼、その下の城壁と塔が見えてきた。そして唐突に、丘の頂きから立ちのぼって空中を漂う蒸気にいまだ包まれた大きな影が現れ、初々しい曙光に照らされた堂々たる聖ソフィア大聖堂の丸屋根が、まるで奇蹟によって無から生じたかのように、浮かび上がった(ウンベルト・エーコ『バウドリーノ(上)』堤康徳訳、岩波書店、2010年、p. 324)。

賢明な読者はおわかりだろう。エーコは、この場面を書くにあたり、デ・アミーチスの描写をほぼそのまま引用しているのである。ウンベルト・エーコは、文体模倣や先行作品の引用が得意な作家としても知られ、『バウドリーノ』にもそれが随所に見られる。エーコにとって、先行作品からの引用はいずれも、その作家へのオマージュなのだろうが、デ・アミーチスにかぎっていえば、コンスタンティノープルの壮麗な絵巻物のような美しさを発見したことへの羨望も、多少は含まれているように思われる。

(翻訳家、慶應義塾大学講師)

… 会館 だ よ り …

イタリア語 無料体験レッスン

- 梅田: 大阪駅前第4ビル
1/6 (日) 13:00~14:30
1/7 (月) 19:00~20:30
- 四条烏丸: ウイングス京都
1/7 (月) 19:00~20:30
- 京都本校: 日本イタリア京都館
1/8 (火) 11:00~12:30
1/12 (土) 11:00~12:30
1/12 (土) 13:00~14:30

スペイン語 無料体験レッスン

- 入門者向け。事前予約制。
日時: 1/8 (火) 19:00~20:30
会場: 日本イタリア京都館 本校
講師: 当館スペイン語講師

ポルトガル語無料体験レッスン

- 入門者向け。事前予約制。
日時: 1/9 (水) 11:00~12:30
会場: 日本イタリア京都館 本校
講師: 当館ポルトガル語講師

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>